

次号予告

特集 精神科集団作業療法

- 小集団の心理的過程……………学習院大文学部心理 中村陽吉
 デイケア活動におけるプログラムの機能
 (クラブ活動の実際を中心に)……………藍野病院 有賀喜代子・他
 集団生産活動……………松尾病院 柏原哲郎
 集団芸術製作活動……………国立武蔵療養所 岡野久雄
 心理劇……………栃木県精神衛生センター 増野肇
 とびら 障害者の精神的自立……………埼玉県障害者リハビリセンター 楠和佐子
 講座 障害学概論 5. 能力低下の障害学……………横浜市立大学病院 大川嗣雄
 PT・OT のためのマイコン入門 5. ソフトウェア(2)
 ………………労災義肢センター 畠山卓朗・他
 プロGRESS 失行・失認の研究における最近の進歩
 ………………神奈川リハビリセンター七沢病院 福井罔彦
 インタビュー<PT・OT の挑戦>
 演劇と作業療法士の2枚看板で活躍の 河本のぞみ氏……………編集室
 あんてな 国際障害者年の成果……………日本女子大学 小島蓉子

編集後記

今年の冬は例年になく厳しく、小さな日本列島は度々寒波におおわれた。この編集後記を書いている3月中旬になっても、雪国の家の屋根上には雪が残り、春の訪れる気配を感じさせない。

今月号の特集は、教育に関連した「理学療法・作業療法カリキュラムの検討」である。両分野の教育機関の数が急増したことで、量的ニーズに応えられるようになったのはよいとしても、質的変革は沈滞したままのように思える。しかし、質を高めるといふ仕事はなにごとにおいても極めて困難なことであり、長期に及ぶ努力を必要とするのが常である。教育の質的改善の一環として、カリキュラムの在り方は重要な問題となる。PT, OT に関する情報源が増え、より高度な技能が求められている時代に、3年間という短い年月でセラピストとしての基盤をつくり上げることは果して可能なことであろうか。

それらのことを顧慮して、松本氏にはカリキュラムの本質論について、歴史的経緯をふまえて述べていただいた。

田村、山田氏には理学療法、作業療法のカリキュラムの問題点、そして今後の方針について提言していただいた。PT, OT 協会の両教育部で協力してカリキュラム改正を行ってゆく予定であるが、種々の示唆を含んだ論文である。また、座談会「変貌する PT, OT 教育」では、大喜多氏を司会に、教育に携わっておられる4人の方々と話し合っていた。

わが国では、カリキュラム編成についても行政指導型の色彩が強いと思うが、われわれの考える PT, OT 像を持った人材の輩出を期待するのであれば、やはりわれわれの責任において望ましいカリキュラムをつくり上げることである。

(奈良 勲)

<編集顧問>

天児民和
九州労災病院名誉院長

五味重春
埼玉県障害者リハビリセンター所長

砂原茂一
国立療養所東京病院名誉院長

津山直一
東京大学教授整形外科

水野祥太郎
川崎リハビリ学院長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上田敏
東大リハビリ部

荻島秀男
ペインリハビリテーションクリニック高島平整形外科

大喜多潤
兵庫県リハビリセンター

寺山久美子
都心身障害者センター

富岡詔子
信州大学医療技術短大

奈良勲
金沢大学医療技術短大

福屋靖子
筑波大学

松村秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

池松洋子

伊東元

岩崎テル子

宇都宮初夫

金子誠喜

鎌倉矩子

木村信子

菊地延子

小嶋裕

斎藤みち子

鈴木明子

高橋正明

田口順子

橋元隆

古川宏

松沢博

宮崎和子

宮前珠子

山田貞雄

矢谷令子

(担当 細田・西塚)